

100

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

日本サンゴ礁学会ニュースレター 2024年2月

contents

page

日本サンゴ礁学会第26回大会報告	2
日本サンゴ礁学会一公開シンポジウム開催報告	2
学術大会発表賞 受賞者の声	3
自由集会 / 小・中・高生サンゴ礁研究ポスター発表報告	4-5
各賞受賞者の声	5-6
新会長の挨拶	6
100号記念のご挨拶	6



日本サンゴ礁学会第26回大会報告

第26回大会実行委員会 井龍 康文（委員長）、浅海 竜司、高柳 栄子

2023年11月23日から26日にかけて、東北大学大学院理学研究科（青葉山キャンパス）で日本サンゴ礁学会第26回大会が開催されました。仙台では17年ぶりの開催でした。参加者は200名を超え、44件の口頭発表、84件のポスター発表（うち、小・中・高校生によるポスター発表15件、保全活動ポスター発表4件）、2件の自由集会有りました。パンデミックが落ち着いてきたとはいえ、対面式（ハイブリッドなし）での開催に若干の不安はありましたが、以前と変わらないほど多くの方にご参加いただきました。学生の参加も多く、口頭発表会場やポスター会場では熱い議論が交わされていました。生物学や物理化学、地球科学、環境学、保全学などの分野を超えて“サンゴ礁”について議論できる場を準備できたことに、実行委員一同、大変嬉しく思っています。

何より今大会では、4年ぶりに懇親会を開くことができました。懇親会への参加者は約150名を数え、宮城のお酒と料理を楽しみながら、懐かしい話に花が咲いて大いに盛り上がりました。山野前会長から中野会長へバトン

が渡り、和やかな雰囲気の中で若手優秀発表賞・ポスター賞の授与式が行われました。そして、次回大会の実行委員長である深見裕伸（宮崎大）から挨拶があり、宮崎県を堪能するべく多くの方が来年も大会参加の意志を固めたようでした。

26日（日）には、公開シンポジウム「生物礁 いろいろな時代、さまざまな生物」が開催されました。大会最終日ではありましたが約60名の方が参加され、6名の講演者から最新の研究成果も含んだ講演がありました。地球科学的なテーマではありながらも、生物学や保全などを専門とする会員や市民の方々にとっても興味深い内容で構成されており、“礁”のダイナミックな変遷史や環境変動への応答について議論が交わされました。

最後に、ご参加いただいた皆様ならびに学会事務局のご協力のもとで無事に大会を終えることができたことを、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



写真1: 熱気に包まれた口頭発表会場

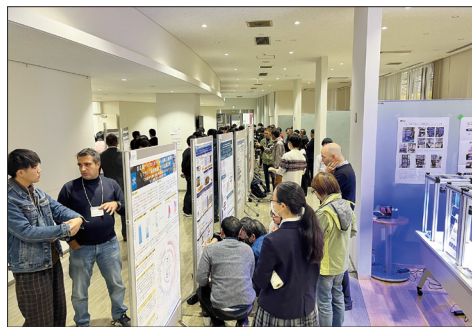


写真2: ポスター前で議論する発表者と参加者



写真3: 久しぶりの懇親会。挨拶する大会委員長。

日本サンゴ礁学会 公開シンポジウム開催報告

「生物礁 いろいろな時代、さまざまな生物」

シンポジウム世話人 井龍 康文・浅海 竜司・高柳 栄子（東北大・理）

日本サンゴ礁学会第26回大会の公開シンポジウム“生物礁 いろいろな時代、さまざまな生物”は、大会最終日の11月26日の9時～12時30分に東北大学青葉山北キャンパス理学研究科大講義室で行われました。参加者は、講演者を含め約60名でした。

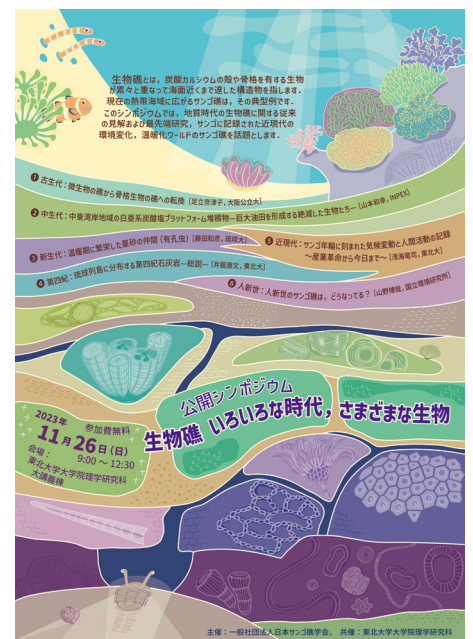
サンゴ礁を統合的に理解するためには、さまざまな学問分野の知見を集積する必要があります。これは日本サンゴ礁学会の設立趣旨にも明瞭に記述されています。第26回大会のホストである東北大は、サンゴ礁の地質学的研究で長い歴史を有しています。そこで、東北大らしく地球科学的観点から、過去から近未来の生物礁を俯瞰・展望するシンポジウムを企画しました。

本シンポジウムの目的は、生物礁の過去と現在について理解を深め、将来を展望することであり、6名の研究者が話題を提供しました。まず、足立奈津子氏（大阪公立大）、山本和幸氏（INPEX）、藤田和彦氏（琉球大）、井龍の4名が地質時代の生物礁に関して、従来の見解および最先端研究を紹介しました。続いて、サンゴに記録された近現代の環境変化へと話題を転じ（浅海）、最後に、山野博哉氏（国立環境研）が温暖化ワールドのサンゴ礁を展望しました。発表内容は、以下の通りです。

第一番目の発表者である足立氏は、オルドビス紀生物大分散事変の初期の微生物礁から骨格生物礁への転換を初めとする古生代生物礁の変遷を、礁形成における微生物類の役割に注目しつつ紹介しました。続いて、山本氏は、現在より温暖で海水準が高かった中生代白亜紀の浅海性炭酸塩プラットフォーム堆積物の堆積物や生物相の特徴を中東を例に紹介し、石油の貯留岩としての重要性に言及しました。藤田氏は、新生代における気候変動に対する生物礁の変遷を説明し、温暖期になるとサンゴは中緯度へ移動し、低緯度では大型底生有孔虫が多様化した例を紹介しました。これは、今後の温暖地球における生物礁の姿を予測するヒントになると期待されます。井龍は、琉球列島の島々に分布する第四紀石灰岩（琉球石灰岩）の研究史を総括し、同列島では1.7～1.4 Ma以降、氷期～間氷期サイクルとローカルなテクトニクス（0.45 Ma頃までは沈降、それ以降は隆起）に制約されな

から島々の周囲にサンゴ礁が形成されたことを示しました。浅海は、サンゴ骨格の化学組成・同位体組成から過去の様々な海洋環境変化を読み解くことが可能であることを示しました。その例として産業革命～今日までの気候変動と人間活動の履歴を紹介し、「人新世」という新たな地質時代が提唱される経緯が説明されました。山野氏は、近年のサンゴ礁の変化を紹介し、現在のサンゴ礁の危機の深刻さを紹介したうえで、気候モデルによる将来予測を行った例を示し、人間社会とサンゴ礁が共存する道を探りました。

最後に、世話人一同、シンポジウム開催に協力していただいた方々、参加者の皆様に深く御礼申し上げます。なお、東北大学の根本 潤氏には、素晴らしいポスターを作成していただきました。ここに記して深謝します。



学術大会若手発表賞(口頭)受賞者報告

Congratulations!



「サンゴ骨格の溶解は海洋酸性化とターフ藻類の付着によって促進される」

Joshua Heitzman (筑波大学・下田臨海実験センター)

この度は、日本サンゴ礁学会第26回大会において、最優秀口頭発表賞をいただき、誠にありがとうございます。そして、学部時代から6年間指導をしてくださった「シルバン アゴスティーニ」先生(筑波大学下田臨海実験センター)と、瀬底ステーションで私を受け入れてくださった「栗原 晴子」先生(琉球大学)に感謝の意を表します。

サンゴが高水温下で白化することは有名ですが、その後、サンゴはどのような運命を果たすのでしょうか? 白化から回復して生き残れるサンゴもありますが、ほとんどのサンゴは部分的、または完全に死んでしまいます。これにより露出したサンゴ骨格は、種々の藻類の集まりであるターフ藻類によって侵略されてしまいます。さらに、ターフ藻類は生きているサンゴを覆い、死に至らしめるだけでなく、サンゴの炭酸カルシウム骨格を溶かしてしまうのです。今世紀末にはターフ藻類はサンゴ礁で増殖を続け、最終的にはサンゴ礁そのものをのっとり、サンゴ礁全体を溶かし切ってしまうかもしれません。

学術大会若手発表賞(ポスター)受賞者報告

「移植アザミサンゴ *Galaxea fascicularis* の卵形成と産卵期の水深間比較」

宮林 弘美 (琉球大学理工学研究科)

この度は、最優秀ポスター賞に選定いただきありがとうございます。

本研究では、アザミサンゴの水深間の繁殖生態の差を明らかにするために、3水深に移植した群体の産卵観察を行いました。その結果、水深40mに移植した群体は他水深よりも遅い8月のみに産卵し、産卵時間も最大3時間遅くなりました。さらに水深が深くなるにつれてより小さく、少ない卵を保有していたことを示しました。しかし、本研究の結果とは異なる先行研究もあるため、さらなる深場サンゴ類の繁殖生態学的な研究が必要だと考えています。

本研究で力を注いだ点は室内で野外環境を再現することでした。今回、現地での産卵観察は困難なため、一時的にサンゴを室内移動させて水槽内で観察しました。その際ストレスを低減するようために、あらかじめ野外で得た環境データをもとに各水深の水温と光量子を調整しました。また、データ取得は10月末までかかり、短期間で試行錯誤をして結果を解析し、データをまとめなくてはならなかった点も苦労しました。心血を注いで向き合ったことが功を奏したと感じています。本研究をきっかけに、今後の日本サンゴ礁学会で深場サンゴ礁や水深間の生態学的に関連する研究発表が増えたらこの上ない幸せです。

最後に、本研究は琉球大学後援財団鈴木祥平海洋研究助成を受け実施しました。支援くださった鈴木様ご家族と、共著者で指導教員の波利井先生や研究をともに行った Frederic Sinniger 博士、Elangga Sitrous さん、この他ご協力いただいた皆様方に深く感謝申し上げます。また会場に興味を持って聞いてくださった方、直接ご助言下さったみなさまに感謝申し上げます。



「3つの形態多型から検討する

Favites valenciennesii (タカクキクメイシ) の分類学的実態」

岸 大悟 (宮崎大学農学研究科)

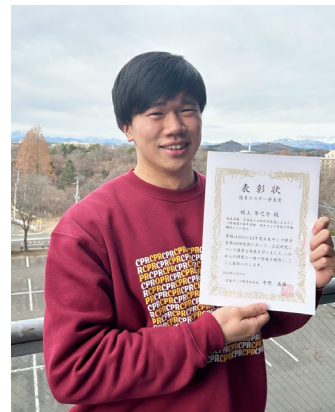


優秀ポスター賞を受賞し、光栄に思っています。本研究ではタカクキクメイシ (*Favites valenciennesii*) の形態多型に迫り、分子系統学と形態学を組み合わせ、種内形態変異の実態を解明することを目指しています。有藻性イシサンゴは形態多型な種が多く報告されており、雑種の存在も示唆され同定が難しいとされます。対象のタカクキクメイシも形態的特徴が不足し、個体配列様式が主にセリオイドであるが、プロコイドになる群体も存在し、癒着度や形状、個体サイズ、隔壁数の違いなど、形態変異が多岐にわたります。これらの情報解読はサンゴ分類研究への

貢献だけでなく、形態学的情報の共有による生態調査や対象種の採取にも寄与できると信じています。今回の結果として、複数のマーカーを用いた分子系統解析で本種は3グループに別れ、各グループごとに特異的な形態的特徴があることがわかりました。これからも形態学的手法と分子系統学的手法を組み合わせ、より客観的なデータを得る努力を続けます。最後に、深見先生のご指導へは感謝の念に耐えません。また、日本サンゴ分類研究会の皆様や研究室の仲間たちにも深く感謝いたします。

「与論島の土地利用変遷によるサンゴ礁環境の経年変動：現生サンゴ骨格の年輪解析からの復元」

堀上 隼之介 (東北大学理学部)



この度は「優秀ポスター発表賞」にご選定いただき、大変光栄に思っております。

近年のサンゴ礁の減退には、気候変動などのグローバルな要因だけでなく、ローカルな要因が関わっていると考えられており、陸上で人間活動に伴う環境変化が、サンゴ礁環境に与える影響を理解することは非常に重要だと考えられます。与論島では、1960年代に水稲耕作からサトウキビの単一耕作への転換がなされて耕地面積の拡大が起り、1980年代以降は、畜産ブームの影響も受けて肉用牛の飼育頭数が増加し、現在では1980年代以前の約5倍にも達しています。このように与論島では戦後以降に陸上環境の大規模な改変がなされており、人間活動がサンゴ礁環境にどのような変化をもたらしたのかを評価するうえで貴重な調査域であると言えます。本研究では、与論島のマイクロアトールから1976年~2022年のサンゴ骨格コアを採取し、その炭素・酸素同位体比および微量元素濃度の時系列データを取得しました。今後はこれらのデータを解析して陸上環境とサンゴ礁環境の繋がりを明らかにしたいと考えております。

最後に、本研究を進めるにあたり、多大なるご指導・ご協力を頂いている先生方に深く御礼申し上げます。

自由集会報告

自由集会①

タイトル：サンゴ礁生態系の保全にサンゴ礁保全学術委員会が果たす役割（主催 サンゴ礁保全学術委員会）

オーガナイザー：サンゴ礁保全学術委員会・委員長 藤田 喜久（沖縄県立芸術大学） [✉ fujitayo@okigei.ac.jp](mailto:fujitayo@okigei.ac.jp)

2023年11月23日 18:30～20:30の日程にて、サンゴ礁保全学術委員会主催の自由集会「サンゴ礁生態系の保全にサンゴ礁保全学術委員会が果たす役割」が開催されました。

現在のサンゴ礁保全学術委員会は、2002年に開催された第5回日本サンゴ礁学会大会において、「本委員会は、サンゴ礁と人間との共存のための方策を探り、具体的な実践方法について関係機関に提案するとともに、ひいては地球環境の保全に関する議論に資するための資料を提供することを目的とします」とのミッションステートメントの元に立ち上げが決定されました。その後、2017年に「サンゴ礁保全学術委員会」と改称されつつ、20年に渡り活動を続けてきました。

委員会の立ち上げから現在に至るまでには、国内のサンゴ礁生態系の現状や保全を取り巻く研究・活動の状況も変わってきています。そこで、今回の自由集会では、これまでのサンゴ礁保全委員会の活動を振り返りつつ、今後、本学会およびサンゴ礁保全学術委員会がサンゴ礁生態系保全に果たすべき役割を見つめ直し、今後の具体的な行動計画について議論する場をすることを目的として開催することにしました。自由集会の冒頭では、委員

会のミッションステートメントの確認、これまでの意見書及び要望書等の提出・公開履歴、サンゴ礁保全奨励賞（現：保全・教育普及奨励賞）の受賞団体（者）、過去の自由集会の開催状況などに関するプレゼンテーションが行われ（現委員長の藤田による）、その後、今後の委員会活動についての議論が行われました。

今回の学会大会は、約4年ぶりに対面で開催されたこともあり、本自由集会も対面にて行われました。本自由集会は、サンゴ礁保全学術委員会の委員会も兼ねており、大会開始前日（11月23日）に開催することになったため、参加者は少ないだろうと予想していたのですが、委員以外にも想像以上の多くの参加があり、大変盛況でした。特に、サンゴ礁保全に関心のある若い研究者が参加されていたことにはとても感銘を受けました。また、自由集会後には、有志の面々にて仙台の美酒美肴を堪能しつつ、さらなる議論を深めることもできました。

サンゴ礁保全学術委員会では、今後もサンゴ礁保全に関わる方々の関心に添えるような自由集会の開催を継続したいと考えています。



写真1, 2：自由集会（現地会場）の様子

自由集会②

タイトル：サンゴ礁×バイオインフォマティクス×環境データで見る新たな知の水平線

オーガナイザー：水山 克（名桜大学 人間健康学部） [✉ m.mizuyama@meio-u.ac.jp](mailto:m.mizuyama@meio-u.ac.jp)

第26回大会中に、「サンゴ礁×バイオインフォマティクス×環境データで見る新たな知の水平線」と題した自由集会を、会場とZoomによるハイブリッドで開催しました。

<概要> 今大会においても口頭・ポスターともにハイスルーブットシーケンサーを用いた複数の研究課題が発表されていました。ハイスルーブットシーケンサーから出力されるデータを用いた解析には、プログラミングの知識や技術が必要で、独学で行うにはまだまだ敷居が高い状況にあります。本自由集会では、サンゴ礁を舞台にフィールドワーク・ウェット実験・ドライ解析までを幅広く行っている研究者らが、研究発表の場では時間的な制約のため紹介することが難しいPCでの開発環境や解析手法の詳細、それらの解析手法によって何がわかるのかについての解説を行いました。個別の演題については、ニュースレター99号に掲載されていますので、そちらをご覧ください。

<参加者の反応> 現地での対面参加者33名、オンライン参加者15名の合計48名の方々にご参加頂きました。参加者の内訳は、大学院生が過半数を占め、その他、学部生・教員・一般（民間企業等）でした。1日のプログラムが全て終了した後の18:30～20:30という遅い時間帯でかつ、各講演者が研究発表に匹敵する高密度の内容を紹介したにも関わらず、居眠りすることなくノートを取る姿が多数見受けられたことは、企画側としてはたいへん有難く、また参加して下さった方々の意気込みが伝わってきました。実施後に行ったアンケート結果（回答数20名）では、各演題の難易度については、「ちょうどよかった」が65%、「演題によりけり」が30%となり、95%の方から「バイオインフォマティクスに関する同様の勉強会を、今後定期的に/不定期に開催した場合、また参加したい」という回答を頂きました。その他、

「試行錯誤の上研究を行なって来たのが良く分かりました。惜しげもなくコツ等を公開して頂き、ありがとうございました。」「密度が高かったのでノートが追い付かず、配布資料があるとよかったです。」「サンゴ礁研究でこれからバイオインフォを始めたいと思っている方にとって、とても有意義な会でした。」等のコメントが寄せられました。会場での様子と参加者アンケートの結果から、サンゴ礁学会内でバイオインフォマティクスについての需要が存在することがわかりました。

<今後の展開> 実施後に講演者同士で行った振り返りでは、今回の自由集会をきっかけにサンゴ礁学会でバイオインフォマティクスのコミュニティを形成し、継続的な活動を行うことが提案されました。コミュニティの運営主体、コミュニケーションツール、情報共有プラットフォーム等についての検討が必要ですが、このような活動を通して日本のサンゴ礁研究の発展の一助となれば幸いです。



写真：会場の様子。熱心に聴講する参加者

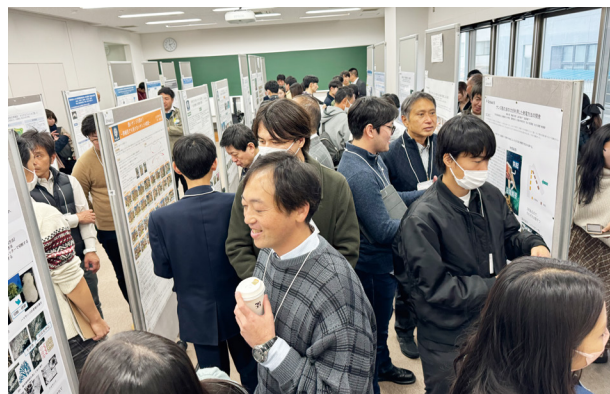
小・中・高校生サンゴ礁研究ポスター発表報告

担当：駒越 太郎（NPO 法人喜界島サンゴ礁科学研究所）

✉ komataro @ kikaireefs.org

第26回大会の小・中・高校生によるサンゴ礁研究ポスター発表には15件の参加がありました。昨年に引き続き現地での大会に多くの生徒の皆さんが集まりました。

発表コアタイム前のポスターを貼る際に各地から集まった生徒同士、お互いにどのような研究をしているのか短い時間の間にも交流を深めて友達になっている姿が見られました。コロナ禍以降2回目の対面となった学会でも、直接会うことの大切さを感じた一コマでした。会場は研究者や学生のポスター発表と同じ東北大学大学院理学研究科で、賑やかな発表となりました。多くの学会員の皆様に足を運んでいただき、最初は緊張していた生徒たちも、発表を繰り返すごとに上手に発表できるようになったと発表と議論を楽しんでいました。議論の中から研究をブラッシュアップするためのアイデアや次に研究したいことがたくさん生まれたようです。発表後、参加者たちには学会から参加証明書と評価書が送られ、次の目標の励みになればと思えました。会場で子どもたちの発表への評価にご協力いただいた皆様も大変ありがとうございました。



写真：小・中・高校生によるサンゴ礁研究ポスター発表 会場の様子

日本サンゴ礁学会 保全・教育普及奨励賞受賞者報告 /

藤田 喜久 サンゴ礁保全学術委員長、2023年度 保全・教育普及奨励賞選考委員会 委員長

中村 隆志 教育・普及啓発委員長

Congratulations!

活動名：「海でも・海に行かなくてもできる！多様な研究者とつくる体験型海洋学習教材『LAB to CLASS』」

活動実施団体：特定非営利活動法人 海の環境教育 NPO bridge（代表理事：伊東久枝） ✉ info @ npo-bridge.org

授与理由

本活動は、「海」を体験的に学んでもらうための教材をインターネットで広く普及し、子どもたちの海洋環境保全意識を高めることを目的として発足したプロジェクトです。このプロジェクトで提供されている学習教材は、教育・デザイン・自然科学などの多分野の専門家が結集して開発されており、デザイン性の高い高品質な教材が無償でダウンロードができるように整備されています。今回は、これらの教材を用いた教育普及啓発活動の今後の発展性や波及効果が高く評価されました。今後、日本サンゴ礁学会との協働を活発化させ、サンゴやサンゴ礁に関連した学習教材を今まで以上に充実させることで、サンゴ礁生態系保全に関わる人材の育成に貢献することが期待されます。

受賞者のあいさつ

当団体がサイト運営を担当しております『体験型海洋学習教材 LAB to CLASS』が保全・教育普及奨励賞を賜り、ありがとうございました。

海洋学習は、地理的要素・気象条件・危険回避・指導者の専門性など多様なハードルが挙げられ、学校教育の現場でも未だ遅れが指摘されます。また、フィールド体験は費用がかかることもあり、保護者の収入や興味に子どもの体験機会の有無が左右され、教育格差も存在します。その問題を解決しようと、教材だけでなく、指導者向け資料や動画等の予備教材もあわせてwebサイト <https://lab2c.net> で無料公開し、誰でも使えるようにしたのが『LAB to CLASS』です。デザイナーやインタープリターなどの協力を得て、市販教材に劣らぬ「見た目も楽しく使いやすい教材」となっています。そして何より、多くの研究者やフィールドワーカーの情報提供を受けて、海の自然や生物の多様な魅力が散りばめられているところに、当教材の価値があると思っています。

LAB to CLASSはサンゴ関連の教材が多いとはいえ、全体の1/4程度。その活動を学会が認めてくださったことは、本当に大きく、身が引き締まる思いです。受賞を機に、研究者のみならずとの連携を深め、サンゴ礁をはじめとする海洋環境保全にさらなる貢献をしていく所存です。

最後に、今回の受賞はサイト運営団体として bridge が受けさせていただきましたが、真の受賞は長い間サンゴ礁保全のための活動を続け、わかりやすい教材に作り上げたフィールドワーカーや研究者、そして教材を使って活動をしている多くの地域の人たちの努力の賜物だと思っています。関係者各位に心よりお礼を申し上げます。



写真3:授賞式にて



写真1:教材で学ぶ子どもたち



写真2:開発した教材

Ultrastructural observation of a symbiotic dinoflagellate *Zooxanthella nutricula* from radiolarians collected off the northwestern coast of Okinawa Island, Japan

Tomoko Yuasa, Takeo Horiguchi, Osamu Takahashi
湯浅 智子 (東京学芸大学 教育学部 生命科学分野)

この度は日本サンゴ礁学会論文賞という荣誉ある賞を賜り、大変うれしく光栄に感じております。

本論文の対象生物である放散虫はサンゴとは近縁ではなく、100 μm程度の単細胞性のプランクトンです。しかし、サンゴと同じように様々な微細藻類を共生させており、渦鞭毛藻もそのひとつです。1881年にBrandtが、放散虫の細胞内に共生している渦鞭毛藻を *Zooxanthella nutricula* として記載したのですが、その記載は細胞内共生時の“黄褐色の球形細胞”に対してなされ、形態記載が不十分だったため *Endodinium* や *Peridinium* などの属名に幾度も変更されてきました。また、“*zooxanthellae*”という用語についても、サンゴやクラゲなどに共生しているさまざまな渦鞭毛藻の総称として使われてきました。

本論文では放散虫の共生渦鞭毛藻である *Z. nutricula* の微細構造観察、及び分子系統解析を行い、様々な海洋生物に共生する、特にサンゴに共生する *Symbiodiniaceae* に属する種との違いを明らかにしました。これらは細胞内共生時にはいずれも“黄褐色の球形細胞”で非常によく似ているのですが、自由生活時の *Z. nutricula* は、Peridinales の特徴を示す鎧版配列を持っており、また、昼間は鞭毛をもつ遊泳細胞、夜間は不動細胞と形態変化する *Symbiodiniaceae* に対し、*Z. nutricula* は昼夜を問わず鞭毛をもつ遊泳細胞である点などが異なっております。Brandtの記載以降、*zooxanthella(e)* に関して混乱しているところがあったのですが、それを整理した内容となっております。

試料である放散虫は、2021年に50周年を迎えた琉球大学瀬底研究施設において2000年からサンプリングを続けており、施設が改修される前の食堂や廊下で、サンゴを研究されている方々に研究のお話を伺い、また、まだ若かった頃は本部町の体育館でバレーボールなども一緒に楽しませていただいた思い出もあります。そのため、私にとってサンゴやサンゴ研究者の方々はとても身近な存在でしたが、日本サンゴ礁学会のニュースレターに原稿を書いている自分に驚いております。



今回の論文は放散虫の共生藻の内容にも関わらず、査読をしていただいた先生、そして学会誌編集委員である小池一彦先生（広島大学）には多くのご助言をいただきました。先生方のご指導のおかげで掲載にたどり着け、そして荣誉ある賞をいただくことができました。心から感謝申し上げます。

また、研究を始めたときからご指導いただいている中野義勝会長、波利井佐紀先生、そして瀬底研究施設のみなさまには心より感謝しております。今後も瀬底研究施設においてサンプリングは続けていき、サンゴやその他の海洋生物の研究から多くのことを吸収し、精進して参りたいと思っております。

新会長挨拶



仙台で開催された第26回大会を盛会のうちに終え、日本サンゴ礁学会は新たな四半世紀を踏み出しています。

1997年に設立大会を開催した本学会は、2004年開催の第10回国際サンゴ礁シンポジウム (10th ICRS) を誘致し、戦前のパラオにおいて国際的なサンゴ礁研究の先駆けを担った日本のサンゴ礁研究の歴史をも引き継ぎ、会員の国際社会参加への大きな契機を提供しました。学会誌の発刊・大会の開催といった基幹的活動に加え、幾つかの学際的なサンゴ礁研究プロジェクトの中核を成し、故川口四郎先生のご遺志による若手会員への活動支援やサンゴ礁保全への積極的な関与といった特色ある活動は、多様な人材が集まる学際学会ならではの特徴を生かしたものとと言えます。

かつて、日本の学術は領域研究の深化を専らとして世界の先端と渡り合ってきました。領域研究の深化は先端技術の進化と相輪をなし、次世代シークエンサーの登場ではサンゴをはじめとした生物の分類も大きな転換点を迎えています。一方で、現代の情報技術の充実は一層強調されたように思います。これに伴い、地球規模での課題解決には学際的で多面的なアプローチが必要であり、これらを統合解析する情報ツールも求められることとなりました。しかしながら、これらの技術革新による世界観の転換が起こる一方で、提案されたモデルと現実の乖離も危惧され、サンゴ礁研究の原点でもあるフィールドサイエンスにおける観察の重要性は変わりありません。フィールドを見るスキルとセンスを磨くには地道な観察による以外に、会員諸氏の持つ多様なフィールド実践はこれからフィールドに出る若いみなさんの標となることでしょう。学会は情報の発信と収集の場であるとともに、このような実践を直接伝達する機会を創出する交流の場でもあります。どうぞ、学会活動に積極的に参加して、多くの機会をご自身の糧とさせていただきたいと思っております。私をはじめ学会運営に携わる諸氏はこのような活発な活動を充実・発展させることに心を砕いてまいります。活動を通じて得たものから次の四半世紀を創出するのは、次世代を担う若い会員です。(中野 義勝)

100号記念のご挨拶

このたび、100号の発行を迎えることができました。これまで記事を執筆してくださった皆様、記事を編集・収集してくださった歴代広報委員長および広報委員の皆様、編集デザインを担当してくださった方々に心より感謝申し上げます。

これまで、年次大会の情報はもちろん、各種受賞者のコメント、研究論文のハイライトや研究室紹介、関連施設の探訪レポート、イベント報告、その他コラムなど、さまざまな情報を発信してまいりました。過去のニュースレターはWebページからダウンロードできますので、ぜひご覧ください。また、新たな記事の提案やご意見・ご要望がございましたら、お近くの広報委員またはWebページ内の問い合わせフォームにてお知らせください。広報委員会では常時メンバーを募集しております。もし、日本サンゴ礁学会の広報活動をお手伝いいただける学会員の方がいらっしゃいましたら、併せてお知らせください。

本ニュースレターは学会員の皆さまの記事なしには成り立ちません。これからも記事執筆のお願いがありますが、何卒よろしくお願ひ申し上げます。今後も広報委員会の活動にご助力いただけますと幸いです。

日本サンゴ礁学会広報委員一同

編集後記

女性のキャリアについて話をしてみたいと言ってくれた学生さん。あまりお話できませんでしたがまた次回JCRS大会にて！

広報編集者 担当: 湯山



2024年2月15日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター [2024年2月]
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.100

- 編集・発行人 / 「日本サンゴ礁学会広報委員会」
樋口・岨・高木・田中(健)・藤井(琢)・本郷・山下(洋)・山本(将)・湯山・善岡・和田
- 発行所 / 一般社団法人日本サンゴ礁学会 ● 事務局 e-mail: info@jcrs.sakura.ne.jp Fax: 088-880-2284
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 185-1 一般社団法人日本サンゴ礁学会